

海の命

立松 和平 作

【第一場面】

◇時

- ・ある日

◇場所

- ・父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海



◆登場人物

○太一

- ・海が好きだった。
- ・漁師になって、父といっしょに海に出たいと言っていた。

○父

- ・もぐり漁師。
- ・だれももぐれない瀬に、一人でもぐってクエをついてきた。
- ・「海のめぐみだからなあ。」と言い、不漁の日が続いても、少しも変わらなかった。
- ・夕方になっても帰らなかった日に、ロープを体に巻いたまま、水中でとききれていた。

○クエ（瀬の主）

- ・光る緑色の目をしている。
- ・父が巻いていたロープ
- ・のもう一方の先にいた。
- ・岩のような魚。



【第二場面】

◇時

- ・ 中学校を卒業する年の夏

◇場所

- ・ 太一の父が死んだ瀬

◇登場人物

○太一

- ・ 与吉じいさに弟子入りをたのみに行き、無理やり弟子になる。

○与吉じいさ

- ・ 太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに言っている漁師。
- ・ 年で、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたいたいと思っている。
- ・ 「千びきに一ぴきでいいんだ。千びきいるうち一ぴきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」と言い、毎日タイを二十ぴきとると、もう道具を片づけた。



【第三場面】

◇時

- ・ 弟子になって何年もたったある朝
- ・ 真夏のある日

◇場所

- ・ 同じ瀬
- ・ 与吉じいさの家

◇登場人物

○太一

- ・ 与吉じいさに、おまえは村一番の漁師だ、と言われた。
- ・ 漁から帰ると、毎日魚を与吉じいさの家に届けに行つた。
- ・ 与吉じいさの死に、「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」
と言ひ、自然な気持ちで顔の前に両手を合わせた。

○ 与吉じいさ

- ・ 船にのってこそいたが、作業はほとんど太一にまかせていた。
- ・ 船に乗らなくなった。
- ・ 真夏のある日に、毛布をのどまにかけて、死んでいた。
- ・ 父がそうであったように、海に帰っていった。



【第四場面】

◇時

- ・ ある日
- ・ 太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。

◇場所

- ・ 母が毎日見ている海
- ・ 太一にとって自由な世界
- ・ 父が死んだ辺りの瀬

◇登場人物

○太一

- ・ 屈強な若者になった。
- ・ 母の悲しみさえも背負おうとしていた。
- ・ いつも一本づりで二十ぴきのイサキをはやばやとった。
- ・ 父が死んだ辺りの瀬に船を進め、海に飛びこんだ。
- ・ 二十キロぐらいのクエにも、興味を持てなかった。

○母

- ・ 太一が父の死んだ瀬にもぐるといつ言いだすかと思うと、おそろしくて夜もねむれない。
- ・ 毎日、父の死んだ海を見ている。

【第五場面】

◇時

- ・ 追い求めているうちに、不意に

◇場所

- ・ 海草のゆれる穴のおく

◇登場人物

○太一

- ・ 青い宝石の目を見た。
- ・ 興奮していながら、冷静だった。
- ・ 大魚は自分に殺されたがっついてい
- るのだと思った。
- ・ この魚をとらなければ、本当の
- 一人前の漁師にはなれないのだ
- と、泣きながら思った。

- ・ 水の中でふっとほほえみ、もりの刃先を足の方にどけ、クエに向かってもう一度えがおを作った。



・「おとう、ここにおられたので
すか。また会いに来ますから。」
と思い、瀬の主を殺さずに済ん
だ。

・大魚はこの海の命だと思った。

○クエ（大魚・瀬の主）

・青い宝石の目。

・黒いしんじゅのようなひとみ。

・ふくらんでいて大きい、刃物の

ような歯が並んだ灰色のくちび

る。

・えらを動かすたび、水が動く。

・岩そのものが魚のよう。

・全体は見えないが、百五十キロ

はゆうにこえていそう。

・太一がもりをつき出

したが、動こうとし

なかつた。

・全く動こうとはせず

に、おだやかな目で

太一を見ていた。



【第六場面】

◇時

- ・ やがて

◇場所

- ・ 村

◇登場人物

○太一

- ・ 村のむすめとけっこんし、男と女二人ずつの子どもを育てた。
- ・ 村一番の漁師であり続けた。
- ・ 巨大なクエを岩の穴で見かけたのにもりを打たなかったことは、太一は生がいだれにも話さなかった。